第 30 回　2010 年の桜

この数年来、朝目覚めると自然に身づくろいをして散歩に出かけるのが習慣になり、天候や身体の具合に余程のことがない限り休むことはない。市内を流れる広瀬川に沿って澱橋から牛越橋の間を通り抜けて右回りで八幡神社の前を通って帰るか、それら二つの橋を往復するだけというのと、澱橋を渡って青葉山の方向に南下し、仙台二高のところを左折して仲の瀬橋を渡って西公園の南角を左折して北上する、という大まかな三通りのコースがあり、それぞれその朝の気分の具合で選んでいる。気が向けば時には途中国宝になっている大崎八幡神社の 108 段程度の石段を登り降りすることもある。

今年の冬は例年よりも雪が少なく、極端に低温という日はなかったが、春の陽気から急に冬に逆戻りするというような現象が何度かあり、寒暖の差が大きく、年齢のせいか寒さが身にしみて感じられた。とくに今年の 3 月は未だ冬の季節が濃厚に残っている感が強かったが、比較的暖かい日が続いた時期もあり、それを待っていたかのように梅が咲き始めたという記憶がある。春の花の始まりを知らせる梅は、断続的に寒暖差が大きい日々が続いたためか花の期間がだらだらと長く続き、花の香りや花模様は観賞に耐えるほどではなかった。しかし一方では、その期間は筆者にとって例年よりも多く花の授粉の機会をもたらしてくれたのも確かで、その甲斐があってか、6 月になった今では青々とした多くの実を結んでいる。

今年は桜の開花時期も遅れた。桜の開花には気温を変数にした花芽の成長速度の計算式があるほど、気温の経過が影響することがよく知られている。気象庁による計算式は、起算日から温度変換日数を積算して開化を予測するものであるが、温度変換日数は、花芽の生長速度を標準温度 15 度の 1 日分の成長量とその前後の温度を比較して、日数で計算したものである。しかしながらこのような式は、このところ毎年が異常気象のためか、あまり用をたさなくなった。

寒くて長い冬が終わり、明るさの増す陽光の下で一斉に咲く桜は、陰鬱な冬を過ごす東北地方ではとくに輝くようである。そして梅の花とは違って桜の花は、咲いてから数日とはもたないため、その一瞬ともいえる美しさがこの世に生きるものの命になぞらえて哀しくもあり魅力的なのである。今年 4 月下旬のある朝はさわやかに快晴で、いつものように広瀬川に向かって南下し、街なかの小さな公園を通り抜ける時に見た桜の花はまさにその時が満開であった。朝日が射し込む桜の枝には、光と影の見事なコントラストに映えて今が盛りの花々が咲きそろい、その美しさに思わず背筋にぞっとするような感触を受けたものである。それから

数日後、水芭蕉の花を探して妻とドライブした山形県との県境近くの薬来山では麓の桜並木も丁度花が満開で、その圧倒的な景観に思わず下車してしまったほどであった。このような情景は同じ時期に同じところを写した記録写真からは味わえないであろう。自分自身の美的感覚の波長に合うような名画の巨匠が描いたものであれば、少しはその時と同じような感触を味わえることができるかもしれないが、その時・その場所・その雰囲気だけは自分自身の脳裏に特別に感じられ、保存されるのである。

桜の花は咲くときは一斉に咲き、咲き誇る極限は一瞬だけで、その後急速に散りはじめるのである。梅の花がなかなか散らずに保たれているのとは対照的である。昔から万葉集や古今和歌集の読み人に限らず、本居宣長や兼好法師や西行法師や芭蕉などなど、日本の歌人・俳

人・芸術家たちをひきつけてやまないのは、桜の絢爛たる美しさの最高潮の一瞬の後にくるのは静けさとはかなさであろう。梅の花を詠ったものにも哀愁を感じるのが多いが、桜のような絢爛さはない。桜の春をこれ以上ないように深々と美しく詠みあげ、書き上げた先人の思いを味わえるのは後世の人間として幸せである。

この春は桜に関してもうひとつの個人的な出来事があった。出来事と言えば大げさで、むしろ桜に関しての本人にとっての新経験とでもいったほうがよいものであるが、5 月下旬のある朝の散歩の途中で桜の木の枝に沢山の椎の実に似た形の実がなっているのを見つけた。葉が豊富な枝にはサクランボよりも小さく堅そうな青いのや赤黒い実を沢山つけていた。木には間違いなく特徴のある桜の樹皮があり、おそらく山桜の一種と思われた。これまで桜といえばソメイヨシノやその後に花の季節を迎える八重桜などに心を奪われ、ソメイヨシノには種子が出来ないことを不思議とも思わなかった知識のなさに恥じ入るばかりである。鳥によって運ばれた種子から桜の木が育ち、やがて深山が桜の山と化すことも可能であり、山一面が桜であるという詩歌も山桜とすれば平仄が合う。

2010 年春は例年よりも特別に桜が印象に残る季節であった。そのなかで考えたことは、美的感覚というのはその対象となる事象の存在を先ず肯定することからはじまるということである。否定的な感情をもつか関心が及ばないと脳裏には入り込まない。美しいと思う心を引き出すためには自分が昔経験したことの蓄積や、デジャ・ビュを生みだすような感性を磨くことが大切であると思う。

リベラル・アーツに親しむことは、自分自身にとって今後も益々大切であると思うこの頃である。